

**発表題目**

高等部職業生活における陶芸作業の実践  
～目的に向かって主体的に作業に取り組む姿を目指して～

新潟県立はまなす特別支援学校  
清野 健男（22年度）

**主張**

当校の高等部職業生活では、職業観や勤労感、作業意欲など、働くために必要な力を身に付けることをねらいとしている。しかし、こうしたねらいは、障害が重い生徒ほど理解が難しく、授業で取り組む作業への意欲が低下している姿が見られている。そこで、本実践では、障害の重い生徒たちが、職業生活でねらう力を確実に身に付けることができるように、目的に向かって主体的に作業に取り組む姿を目指した。そのために、生徒の目的意識に目を向け、「自分のため」や「人のため」に作業をすることで、「作業して良かった。」「働くっていいかも。」という思いを味わわせることを大切に実践を進めてきた。本発表では、目指す姿の実現に向け、有効であった「作業開発」「目的の明確化」「目的達成のための支援」「適切な評価」の4つの手立てについて紹介する。

**1 発表題目について**

**(1) 当校職業生活（CU）の内容**

当校の職業生活＝CU（キャリアアップ）は、週30時間のうち、13時間を占めており、高等部の主活動に位置している教科等を合わせた指導である。CUでは、前述の主張で述べたねらいを達成するために、生徒の実態や将来の進路先等から生徒を3つのグループに分けて活動を行っている。本実践の対象は、障害が重く、支援度の高いCU1グループである。CU1の生徒たちは、目的意識や抽象的な見通しがもちづらく、同じ作業の繰り返しが苦手な集中が途切れやすいという実態がある。こうした実態より、ペグ挿し、ボルトナットやボールペンの組み立て等、手順が1～3工程ほどの軽作業に取り組んでいる。この軽作業には、目と手の協応動作や手先の巧緻性を高めるとともに、工程が分かりやすいために自分ができる作業に取り組むことで気持ちの安定を図れるなどのメリットがある。しかしその反面、何のため作業しているかや、作業の成果などを実感したり、一つ一つの作業に変化や発展性をもたせたりすることが難しいなどのデメリットがある。そのために、4月より作業への意欲が低下している姿が度々見られるようになっていた。抽出生徒Aはそれが顕著に表れていた生徒である。

**(2) 抽出生徒Aの姿とCU1の活動の見直し**

Aは、高等部2年生の男子生徒で、主な障害はダウン症候群である。言葉でのコミュニケーションが可能な生徒で、教師の指示を理解して行動することができる。また、CU1のグループの中では手先が器用な方で、軽作業に一人で取り組むことができる。しかし、他の生徒同様に、同じ作業の繰り返しが苦手な集中が途切れやすいという実態がある生徒である。Aは、作業に意欲的に取り組むときはあるものの、作業を続けるほど意欲が低下していき、時には、机に伏してしまうことがあった。このような姿より、Aを含むCU1の生徒たちは、CUでねらう職業観や勤労観、集中力等を身に付けることが難しい状況にあると捉えた。

Aの姿よりCU1の活動を見直すと、軽作業は作業をすること自体が目的になっていた。また、生徒にとってその目的の理解が難しかったことや、目的が不明確なまま作業を続けることで意欲が低下していることが分かった。以上の点を改善し、生徒にとって明確な目的のある作業に取り組み、CU本来のねらいを達成できるように本実践を構想した。

### (3) 目指す姿と迫るための手立て

本実践では、CUでねらう力を身に付けることができるように、目的に向かって主体的に作業に取り組む姿を目指し、「作業をすること」だけではなく、「自分のため」や「人のため」といった目的をもたせながら、自分の取組の良さや働く喜びを実感できるようにしていく。そのために、本実践においては、「作業開発」「目的の明確化」「目的達成のための支援」「適切な評価」の4つについて取り組んだ。

### (4) 作業種の選定

本実践を行うにあたり、軽作業に代わる作業を開発する必要があった。陶芸は、こねる、丸める、道具を使うなど、取組方の幅が広い作業で、作ったものは形として残り、皿やコップなどを作れば使うことができる。また、成形の方法、焼き加減などで、仕上がりが変化するので、毎回違う色合いや風合いを楽しむことができる。したがって、使用用途に沿った形を成していれば、「これは良い」「これはだめ」と言った評価はあまりなく、製作の自由度が高い作業とも言える。さらに、生徒の実態に応じた取組方ができたり、実際に使えるものが作れたりするなどの良さがあることから、生徒が「自分ためや人のために使うものを作る」という目的意識をもって、自分に合った方法で主体的に取り組むことができると考えた。また、作ったものを自分で使ったり人に使ってもらったりすることを通して、「陶芸の作業をして良かった。」「働くっていいかもな。」という思いをもてると考え、陶芸を選定した。

## 2 本実践の単元について

### (1) 単元名 「いろいろな人に喜んでもらえる箸置きを作ろう」

高等部生徒10人(1年生男子6人、2年生男子1人、2年生女子1人、3年生男子1人、3年生女子1人)

### (2) 単元の指導計画(全80時間程度)

作業目的の対象を自分から家族、お世話になった人というように、自分以外の人へ発展していけるように年間を通した3次の単元構成にした。生徒の目的意識は、第1次が自分のため、第2次から人のためになっている。また、この単元は現在も実践中であり、本実践の発表は、第2次の中盤までをまとめている。

単元構成	主な学習活動
第1次 「自分が使う箸置きを作ろう」 (5月～7月) 25時間	・陶芸用粘土で作りたいものを自由に作る。 ・自分が使う箸置きを作る。 ※箸置きを家族に使ってもらおう。(第2次につなげるための活動)
第2次 「お世話になっている人のために箸置きを作ろう」 (9月～12月) 35時間	・職員、学校行事等でお世話になっている人のために箸置きを作る。 ・事業所見学先や作業提供してもらった人たちのために箸置きを作る。 ※12月のはまなす作品展で来校者に販売する。(第3次につなげるための活動)
第3次 「いろいろな人に使ってもらえる箸置きを作ろう」 (1月～3月) 20時間	・保護者、職員、放課後デイサービス、現場実習先等、生徒と関わりかかわりのある人たちから注文を受けて箸置きを作る。 ・保護者参観日に販売活動をする。 ・市内施設のフリー販売スペース等で販売活動をする。

## 3 陶芸作業の実践とAの様子

### (1) 第1次「自分が使う箸置きを作ろう」

#### ① 陶芸に興味・関心をもって取り組む姿(作業開発)

陶芸に対する生徒の興味・関心や取組方を見るために、自由製作をする活動を取り入れた。Aは、粘土を

握る、丸める等して感触を楽しみながら自分が作りたいものを製作することができた。また、生徒が製作した作品を鑑賞する機会を設定した。自分の作品を手にとって「良いものができた。」と喜ぶAの姿や、友達の作品を指差して称賛する生徒の姿が見られた。陶芸への興味・関心の高まりを捉え、作業製品作りとして取り入れることにした。また、陶芸作業への理解度や手先の巧緻性等から、作業製品を箸置きに選定した。

## ② 自分が使いたい箸置きを考えたり、オリジナルの石膏型を使ったりしながら成形に取り組む姿

(目的の明確化・目的達成のための支援)

箸置き作りを始める際、自分が使う箸置きを作ることを目的として提示し、手びねりでの成形方法や製作スケジュールを確認した。Aは、目的を理解し、家庭で使ったことがある経験から、自分が使いたい箸置きの形を考えて成形に取り組むことができた。また、手びねりで成形することが難しい生徒のために、オリジナルの石膏型を使った型押しの方法を提示すると、Aも興味・関心をもって取り組むことができた。また、目的やスケジュールを知ること、活動に見通しをもち、箸置きを成形するために自分に合った方法を試行しながら取り組むことができた。

## ③ 自分が作った箸置きを使ったり、保護者からの評価を聞いたりすることで、自分の取組の良さを感じている姿 (適切な評価)

自分が作った箸置きに親しみをもてるように、昼食で実際に使う機会を設定した。ちゃんと箸が置けることを確認すると、Aは、「箸が置けた。」「いいね。」と自分の箸置きを評価していた。また、ある生徒から「お家に持ち帰りたい。お母さんやお父さんにも使ってもらいたい。」という発言があった。そこで、箸置きを家庭に持ち帰って保護者に使ってもらうことにした。保護者からの評価を集約して共有すると、「やったー。」「またやりたいな。」とうれしそうにしている生徒の姿や、評価の書かれた用紙を笑顔で見ているAの姿が見られた。第1次を通して、作業意欲が高まり、目的意識が自分以外の人へ変化し始めたことを確認することができた。

## (2) 第2次「お世話になっている人のために箸置きを作ろう」

### ① 人に使ってもらうために仕上がりを意識しながら作業に取り組む姿 (目的の明確化・目的達成のための支援)

第1次の生徒たちの姿を受け、「人のため」に作業をする第2次に発展させた。「人のため」に作業するに当たり、保護者以外で、意識しやすい身近な人として、教頭先生から箸置き作りの依頼を受けることにした。また、「箸置きの底面をツルツルにしてほしい。」という要望を今後の課題として共有し、箸置き作りに仕上げ磨きを導入することを確認した。作業中、Aは「教頭先生。」とつぶやきながら、箸置きを型押しで成形していた。しかし、Aの箸置きはこれまで成形してきたものとは異なり、余分な粘土が付いていたり、自分が作りたい造形が追加されたりしたりしていた。第1次では、型押しの仕上げを教師と一緒にいたため、余分な粘土を取り除いたり、形を整えたりするといった作業はまだ身に付いていなかったのである。また、人のために作るという意識は芽生えつつも、人に使ってもらうために作るとはどういうことかを理解するには、更なる支援が必要であった。そこで、教頭先生が依頼してきたのは、第1次で作成していた形や大きさの箸置きであることを確認し、型押しの成形の完成品を提示するとともに、同じように作るよう指示を出した。すると、Aは、型押しの完成品と自分が作ったものを見比べ、「ちょっと多いな。」と言いながら、余分な粘土を取り除いて成形に取り組むことができた。ここでのAの課題は、製品の質に関わる課題であったため、解決策をグループで共有した。Aの取り組みによって、製品の質を考えるきっかけが生まれ、人に使ってもらうために作るとはどういうことなのかをグループ全体で確認することができた。

仕上げ磨きの作業では、教頭先生が言っていた『ツルツル』とはどういう状態かが分かるように、磨かれた箸置きと磨いていない箸置きの手触りを比較する活動を設定した。手触りを比較することで、『ツルツル』という状態が分かり、「ザラザラよりツルツルの方が良い。」という思いを生徒はもつことができた。また、Aは、完成品と自分が磨いている箸置きを比較しながら磨き、『ツルツル』になるまで磨くことができると、底面を触りながら「やっとツルツルになった。」「これを教頭先生にあげる。」と笑みを浮かべていた。成形と仕上げ磨きの工程における完成品を確認し、自分が作業しているものと比較することを通して、良

い仕上がりになるように、取組方を見直しながら作業することができた。

### ② 依頼者から直接評価を受けて、働く喜びを感じている姿

(適切な評価)

依頼者からの評価によって自分たちの取組の成果を実感できるように、仕上げた箸置きを教頭先生に納品する場を設定した。Aは、箸置きを手渡した際に、教頭先生から「ありがとう。」と言われると、照れた様子で「どういたしまして。」と返答していた。また、「すごい！ツルツルだ！」や「早く使いたいな！」「後援会の人たちも喜んで使ってくれるよ！」などの評価を直接聞き、生徒たちは拍手をして喜んでいて、第2次を通して、人のために作業し、人から感謝される喜びを味わったことで、更に作業意欲が高まっている様子を見ることができた。

### ③ 箸置き作りを振り返り、自分の取組の良さや働く喜びを改めて感じている姿

(適切な評価)

記述や○×など実態に応じた振り返りシートを使って、これまでの取組を生徒自身が評価する活動を設定した。活動中の写真を見ながら、「また、やりたい」と意欲的な感想をもったり、箸置き作りが良かったかどうかについて○を選択して自分の気持ちを表したりする姿が見られた。Aは、「楽しかった。」「教頭先生にあげて良かった。」と発言したり、学部でお世話になっている先生の名前を挙げて「この先生にあげたい。」という思いをもったりすることができた。自分が作った箸置きの良さ、教頭先生のために作ったことで得られた喜びを振り返ったことで、目的の対象がAの中で広がったことを確認することができた。

## 4 本実践の成果

### (1) 抽出生徒Aの姿の変容

4月当初は、目的意識がもてず、軽作業に集中できないことがあったが、陶芸に興味・関心をもち、「自分が使う箸置きを作る」「教頭先生のために箸置きを作る」という目的を理解して作業に取り組むことができた。また、作業中は、自分で形を考えて成形したり、依頼者のニーズに応えられるようにオリジナル石膏型や完成品を活用したりしながら意欲的に取り組むことができた。そして、箸置きを使ってみたり、他者からの評価を受けたりすることなどを通して、自分の取組の良さや働く喜びを実感することができた。以上の姿から、Aの目指す姿は達成され、職業観・労働観、集中力や持続力等のCUのねらいにも迫っていると考えた。

### (2) CU1担当職員の評価

本実践の客観的評価を得るために、CU1の担当職員に授業評価アンケートを実施した。目指す姿についての達成度は、グループ全体では80パーセント、Aは100パーセントという評価だった。また、目指す姿に迫るための有効な手立てについては、「保護者からの評価を共有したことが良かった。」「依頼者から直接話を聞くことが有効だった。」などの評価だった。そして、箸置き作りが有意義な学習活動だったかについては、「人に使ってもらおうという意識をもつきっかけになった。」「できたものを手にしてもらえることが働く喜びになる。というのはCU1の実態に近い。」などの評価だった。以上のアンケート結果より、本実践は、客観的に見ても成果があったことを確認することができた。

## 5 本実践のまとめと今後の方向性

本実践の成果を踏まえ、生徒の実態に応じた作業開発、生徒に分かりやすい形での目的の設定、生徒の実態に応じた目的達成のための支援、自分の取組の良さや働く喜びを実感できる適切な評価の4つが、目指す姿に迫るための有効な手立てだったと言える。

今後の方向性としては、第2次の終盤から箸置きの販売活動を予定している。いろんな人に喜んでもらえる箸置きを作っていくことができるように、目指す姿の実現に向けて支援を継続していく。また、本実践の成果を踏まえて、CUのねらいに迫るための授業の在り方を更に追究していく。